

佳作

チャロウのヨホウ

富山県 高岡市立牧野中学校二年 中澤 莉聖

小学五年生の冬休み、私は祖母の家で過ごしていた。雪がしんと積もる中私は一匹の野良猫と出会った。尻尾から真っ赤な血をポタポタと垂れ流しこっちに向かう姿は、とても悲惨な光景で衝撃的だった。脚や耳にも怪我を負い、助けを求めている姿を見てすかさず祖母と病院へ連れて行った。先生いわく、おそらくトンビやタカに狙われたのだろうと言っていた。無事に怪我の手当てをしてもらい、このまま元気に生きてほしいと願いながらお別れをした。もう会うことはないと思った。しかし翌日、祖母の家の前に再びその猫がやって来た。驚いたと同時に、祖母の家で飼い猫として招くことに決心がついた。凶暴で警戒心がとても強く、近づいただけで歯をむき出しにしてシャーっと今にも襲いかかりそうな猫、しかしどこか寂しげで助けを求めているよう

の猫になった。今がチャロにとって幸せかどうかは私達には正直分からない。しかし、心を許し無防備に眠る姿を見ると、私はとても幸せな気持ちになる。チャロも同じ気持ちでいてくれたらいいなといつも思う。今は一緒にご飯を食べたり添い寝をしたり、私にとってとても大きな存在でかけがえのない家族だ。現在、チャロは病気を抱え大きな手術も経験した。今も通院しているしきつと一生続くだろう。ペットを飼えば幸せなことばかりではない。お金もかかるし苦労する事も沢山ある。それでも大事な家族に変わりは無いから、何があっても共に生きていきたい。

な気がして放っておけなかった。まずは病院で去勢手術をしてもらい少しずつ関係を深めていった。名前はチャロ。姉と一緒に名付けた。その日から、食べ物を与えたり寝床を作ったりしてその子の居場所を作ってあげた。少しでも人間との距離を縮めて安心させてあげたいという一心で愛情を込めて可愛がった。時に噛み付かれたり引っ掻かれたり手なづけることに苦労はしたが、長い月日をかけ徐々に私達への警戒心が解けていったようだった。

数ヶ月経ったある日、夕方いつもの時間に我が家に来て来たチャロは、生後間もない小さな子猫を連れて来た。いつも通りチャロにご飯を与えると、真っ先に食いつくはずのチャロが一口も食わずに子猫が食べる姿を隣で見守っていた。私はチャロの優しさに涙が出そうになった。きつとここへ来ればご飯が食べれるし温かい居場所があるよと子猫に教えて連れてきたんだなと思った。あんなに生きる事に必死で毎日命がけで過ごしてきたであろう野良猫が、自分よりも弱い子猫を守ってあげる姿に心を動かされ、温かい気持ちになった。

出会って三年が経つ今、とても人懐っこく優しく穏やかな顔つきになり昔とは似ても似つかないほど